

「井川渡船の活性化プロジェクト」報告と課題

Reporting and challenges on “Activation Project of Ikawa Tosen”

| | |
|------------------|------------------|
| 外立 ますみ | 戸田 里和 |
| Masumi HASHIDATE | Satowa TODA |
| 薮崎 栄 | 池山 眞一 |
| Sakae YABUSAKI | Shinichi IKEYAMA |

(平成29年10月3日受理)

要旨

本稿は、平成28年度静岡市・焼津市地域課題解決事業において、静岡市最北部にあたる葵区井川地区の井川ダム湖を運航する渡船の回遊性と活性化をめざし、本学の集中講義の中で学生たちが本村を中心とした現地調査を行い、チームごとに活性化に向けてのいくつかの提案をするまでの報告と課題について述べたものである。

1. はじめに

平成28年度静岡市・焼津市地域課題解決事業の取り組みを、静岡市井川支所から「渡船の航路・運行体制の見直しを通じ井川地区の回遊性を向上して欲しい」との依頼を受けたという設定で、学生の視点から地域活性化に貢献する「井川渡船の活性化プロジェクト」（以下、本プロジェクトとする）を実施した。教員の専門分野・知見を生かした地域連携・地域貢献の実践と、実社会をテーマとしたPBL（課題解決型学習）手法により学生の教育効果の向上を目指した。

本プロジェクトは、4名の教員チームによるオムニバス形式の専門講座（集中講義）として約5ヶ月間取り組み、「産官学住」の連携を重視し、地域の活性化と学生の成長が双方向に高まる内容となっている。

本プロジェクトの目的 昭和32年（1958）、大井川本川上流部に井川ダムが竣工し、井川地区の本村の一部と島和合という集落が湖底に沈んだ。対岸への生活道が遮断されたため、その代替え交通路として昭和33年より渡船の運行が始まった。平成6年からは、2隻のうち1隻を遊覧船に切り替え、定期観光便が運航されるようになった。その井川湖上を航行する渡船を活用し、井川地区を活性化させる方法をチームで考える。フィールド・ワーク（自ら体験して自然地理を知る、地元の人々から話を聞く、資料を調べる）により、井川の歴史や人々の暮らし・資源を知り、活性化プログラムを提案することを目的とする。

キャリア教育的視点 身近な社会（地域）に対する愛着は、そこに住む人々との触れ合いや、自然や遺物と自分との関わりを感じたり、地域での活動や行事を体験する中で育まれていくものである。本プロジェクトを通じて井川地区の地域資源に対する気づきの機会をつくり、井川を愛する心を培う。学生らが主体的に地域の課題解決に取り組み、地域活

性化活動を通じた人間関係作りを行い、未来をひらく心豊かな人材を育成することを目的とする。

2. PBL型授業の実践

2-1. 授業前の準備

授業概要の説明会実施 9月30日 井川渡船を活用した井川地区の活性化について、授業概要の説明ならびに担当する教員チーム4名の自己紹介、チームメンバーの募集を行った。また、第1回授業開始の10月28日迄はポスターを学内に掲示し、本プロジェクトのチームメンバーを募集した(図1)。

現地事前調査 10月4日 民俗学専門教員1名が事前に現地を訪れ、井川支所の担当者と打合せを行った。また地元キーパーソンと面談し、地域住民に寄り添った提案ができるよう検討した。

10月29日 本プロジェクトに関わる教員3名が現地を訪れ、渡船に乗船したり、宿泊施設への聞き込み、施設間の所要時間をはかるなど現地調査のスケジュールを組むための事前調査を行った。

図1 学生募集のポスター



2-2. 授業実施内容

授業は「井川渡船の活性化プロジェクト」と題して、表1のような内容で進めた。井川地区の概要を説明した後、井川支所の職員が出演するビデオレター(渡船についての解説とミッションを語る)から全員が本プロジェクトの趣旨を理解した。受講者となった学生9名を3チームに編成し、チームごとに地域についての基礎知識や情報をネットや資料から集めるという準備期間を経て、11月と12月に1泊2日ずつの現地調査を行った。現地では、渡船や廃線を体験するほかに、地域の人々に接して話を聞くことに重点をおいた。

2-2-1. 導入・事前トレーニング

事前学習 講座開設にあたってまず心配されたことは「意識の高い学生が集まってくれるだろうか」という点であった。後期だけのそれも言わば飛び入りの講座であり、もしこの講座に参加するにしても既に登録済みの講座の間を縫って受講しなければならない。そうした困難な状況のなか、先生方の熱意により優秀な9名の学生が参加してくれた。

表1 集中講義「井川渡船の活性化プロジェクト」のシラバス（授業内容）

| 実施月日 | シラバス内容 |
|--------|--|
| 10月28日 | 事前トレーニング 1 ー井川はどんなところ？ー （教員3名による事前現地調査実施 10月28・29日） |
| 11月4日 | 事前トレーニング 2 井川はこんなところ |
| 11月18日 | 事前トレーニング 3 フィールドワークの心得 |
| 11月19日 | 井川地区現地調査 1（宿泊） |
| 11月20日 | 井川地区現地調査 2 |
| 11月25日 | 調査後のまとめ 1 |
| 12月2日 | 調査後のまとめ 2 |
| 12月17日 | 補足調査 1（宿泊） |
| 12月18日 | 補足調査 2 |
| 12月23日 | 調査後のまとめ 3 |
| 1月20日 | 調査後のまとめと成果発表会プレゼン練習 1 |
| 1月27日 | 調査後のまとめと成果発表会プレゼン練習 2 |
| 2月3日 | 調査後のまとめと成果発表会プレゼン練習 3 |
| 2月22日 | 「井川渡船の活性化プロジェクト」成果発表会（於静岡市井川支所ホール） |
| 2月27日 | ふりかえりシートを学生に送付（3/5回収後、教員からのコメントを入れ再び学生に送付） |

この講座の目的は対外的、学内的二つの方向性がある。対外的には静岡市役所井川支所の依頼に即したもので「如何にして井川渡船の利用促進をはかり、ひいては井川の振興に資することができるか」ということであり、これについては既にいくつもの提言がなされており、それらの提言を凌駕する斬新で魅力的な提言を目指すというものである。もちろんこうした提言をするのは学生であり、学生の本分は自己の資質向上をめざすことにあるのであり、こうした提言を通して自己を磨いていかななくてはならない。これが学内的な目的である。

さて、こうした講座の目的を達成するためにはどのような段取りが必要であろうか？

まず井川について良く知ることが必要である。井川はどういう場所でその人々はどういう生活をしていてどんな点に魅力を感じていて、何を困難に感じているのか？これらのことを知らずして提言をしても全く陳腐なものになってしまう。本来であれば「井川の歴史」「井川の風土」「人々の生活」「近代化と生活の変化」などそれぞれをテーマとして検討できればより充実したものになったかと思う。残念ながら他大学が実施したフィールドワークの報告書⁽⁵⁾を読ませる程度しかできなかった。

こうしたなか、10月末金曜5時限に第一回講座が開かれた。初めに静岡市井川支所の加藤氏からのVTRレターを視聴し、地元の方のこの講座に対する期待を共有した。学生たちには静岡県の主要河川のみが描かれた白地図を配布し井川の場所を知ってもらうことから始めた。井川地区は大井川河口から90kmしか離れていないが、川沿いに町に出ることは困難で大日峠を徒歩で越えて静岡との結びつきが強かったことやその生活も井川ダムの建設により一変したことなどを紹介した。

その事例として、以下は『井川雑穀文化調査報告書』⁽⁶⁾からの抜粋を紹介する。

奥山と呼ばれた赤石山地がもたらす金山と森林資源を現金収入にしながら、焼畑栽培による雑穀を主食にしていた人々の生活は、ダム開発を境に激変した。一つには、井川地区の人々の悲願であった道路の改良である。それまで静岡市街地に出るには、

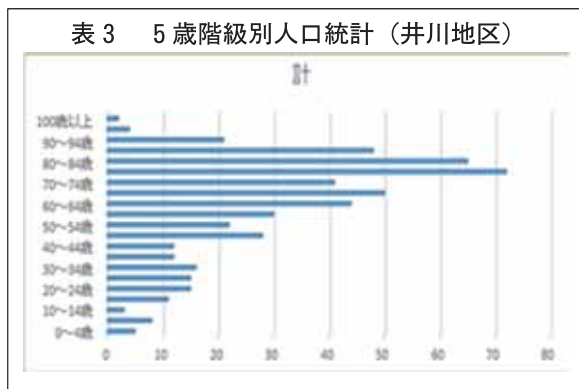
大日峠を越えるのが最も一般的なルートであったが、当然のことながら徒歩で越えるほかない。(pp.4下段)

当時は女の二股下衣は「みっともない」とか「変だ」と言われたが、ダム建設以後、人目をはばからずに多くの女性がはき出すと価値観が逆転した。むしろ着物で農作業をしていると、「ビーラン、ビーランしている」と悪口まで言われるようになったという。(pp.82上段)

地理学的な見地から 次に気象庁からのデータ⁽⁸⁾を元にして作成した静岡市・川根本町と井川の気温変動を比較したグラフ(表2)や、静岡市が公表している「5歳階級別・学区別人口統計」から作成したグラフ(表3)を利用して、この地区の状況を把握しようと努めた。



また地元理解のために静岡市などが発行している「井川めぐり」、「オクシズ在来市場」といったパンフレット類、井川地区の地図なども利用した。これら資料を活用して井川地区のもつ強み・生かすべきチャンスと、逆に弱点や他地域と競合する点などに分けて各自に検討させた。いわゆるSWOT分析の手法であるが、この手法の詳細を説明している機会が無く未消化で終わってしまったのは残念であった。学生にとってこのような手法を駆使する機会もこれから出てくるのではないだろうか。



ついで自分なりの分析の結果考えた井川地区が目指すべき方向性をチーム内で話し合い、チームとしてのテーマを絞り込ませた。そしてチームとして立てた仮定を実証するためには、どのような現地調査が必要であるかを検討させた。また調査内容を明確にするインタビューの仕方なども検討させた。

これらについては、とても講座時間内では時間が足りず、各チーム毎に時間を調整しながら話し合いを持たせ、その結果をレポートで提出させるようにした。

実際の調査の雰囲気は、昨年度実施の本川根町におけるフィールドワークに参加した者がいたのでその体験談を聞くことによりつかませた。

実際に現地調査が行えるのは土・日の1泊2日だけである。それも移動の時間を考えれば丸一日程度しかない。限られた時間を最大限活用するには緻密な事前準備が必要である

が、残念ながら事前準備の時間も十分とはいえない状況であった。その困難な状況の中で、現地調査の詳細な行動計画を立案していった。しかしこれはあくまでもシミュレーションであり、実際には想定外のことが多々予想される。その中でどのような行動を取れるか、学生たちの対応力が問われる場面である。

11月19・20日の二日間の現地調査が始まった。

2-2-2. 現地調査と調査報告書の作成

高齢者のムラ 11月19日 現地調査初日、夕食後の宿舎に井川森林組合長（井川観光協会会長でもある）をお招きし、学生の前で全般的な井川の話をしていただいた。井川にUターンして40年間活性化に取り組んでこられたという。「井川は今、高齢者の村。（人口が最大約6,000人に膨らんだころに比べ）人力も財力も回復できないでいる状態なので、コストのかかる提案や、短期決戦のような人手の要るイベントは無理だ。登山シーズンの夏から紅葉シーズンを迎える秋までは、観光客も来てくれている。年間を通してそこそこの客が来てくれればいいと思っている。

まずは、このようなコメントをもらい、高齢化率の高さ、つまり若い世代の流出がさまざまな可能性を阻んでいることを知った。同時に、それほど観光を念頭において活性化をしようとは思っていないことも垣間見えた。

週末は休業する商店 それを端的に現していたのは、平日に営業しているほとんどの店が観光客が多くなる週末の土・日曜日に店を閉めていることからいえる。例えば、観光客がダム堰堤から渡船に乗船し、周囲の景色を楽しみながら本村に着くと、あたりは人気もなく静まりかえっているという光景である。一部の施設、南アルプス井川ビジターセンターやアルプスの里（JA婦人部の運営する食品加工所兼食堂）では休日でも食事を提供しているが、お土産や地場産品などの買い物をするとこがこれらを含む一部の施設に限られている。

では、井川の人々は土日は何をしているのか、と聞くと「静岡のマチへ下りて行き、大型店舗などで買い物をする。そのために週末は休む」という。一般家庭の週末と変わりがない。つまり、商店は地元の人たちに向けて営業していることがわかる。

翻って、平日、昼どきになると本村の商店では魚や肉、揚げ物などの暖かいお惣菜やご飯、カップラーメンなどの乾物も店頭にならび、お年寄りが昼ごはんを買いに来て店が賑わっている。バックにして店頭に並ぶお惣菜やご飯は、一人暮らしのお年寄りでも食べられるような小サイズで小分けにしたものが多いことも、この地域の購買層の中心がお年寄りであることをうかがわせている。

学生たちが現地調査に訪れるとしても、平日は授業があり難しい。週末に出かけてあたりを散策すると、地元にいるお年寄りに話を聞くことはできても、働き盛りの年代の人々

画像1 森林組合長とプロジェクトメンバー



は留守にしているなかなかつかまらない状況があり、現段階では昼どきの商店の賑わいを学生たちに見てもらうことができないでいる。

井川の人の気質を形成した歴史的要因 さて、井川の人々の気質を形成してきたと思われる歴史的背景を概観すると、近世には砂金掘り（鉤山採掘）、明治期になると奥山での伐採や川狩り（木流し）などの林業に携わる人が、また昭和20年代後半からは、ダム工事に携わる人々が外部から移入し、それを受け入れてきた。さらに南アルプス山麓に立地するため、登山道にもつながるこの地では、山への豊富な知識や経験を活かし、早い時期から登山者のガイドを務めた人も少なくない。環境的には閉塞的であるが、地域の人々は決して閉鎖的ではない。人懐っこさが持ち味であると感じる。

このような井川の特性を知るために、現地調査は地域資源を見て歩く、つまり外部からの観光客の視点に立つだけでなく、地域の人々にも対面して話を聞いてくるように告げた。井川という地で誰に出会うか、世代の違う人々と会話をつなげることができるか、本音を引き出すことができるのかなど、実践的に揉まれて人の真意を読み取ることができる力を培ってほしいと思っている。

報告書の作成 井川を訪れたのは初めてであり、取材もしたことがない9名の学生がどんなことを見聞き何を感じたか、チームで報告書にまとめてもらうことを課した。

日時、場所、取材対象者、取材の内容、そして最後にそこから得られたことをたたき台にして活性化につながる提案をする。このまとめをすることで、自分たちがどんな行動をとったのかを客観的に受け止められ、文字化することで情報や思考の不確かさが浮き彫りになるので、どのように修正していくかが具体的に利点がある。

最初にあがってきたものは、どのチームも学内の講義でノートをとっているような箇条書きの内容であった。これでは備忘録にしすぎず、報告書（人に読ませる文章）とはいえないので、何度も返却して修正を繰り返しながら、読める文章にしていった。

いっぽう作業そのものについては、最初はリーダーがひとりで報告をまとめていたが、ワークシェアをしたり情報をシェアすることこそがプロジェクトで求められることであるので、1チーム3名で作業を分担するように促した。

結果、その報告からうかがえるのは、3チームともそれぞれ違う視点をもって観察し、人に接していたことである。例えば、Aチームは観光客の視線、とくに子どものいる若い家族に着目して工夫が必要なところを細かくチェックして歩いている。また、Bチームは、船上から望むすばらしい紅葉を見てツアーを企画する側の視点に立ち、水上からここにしかない紅葉や星空を見せよう、または廃校を大人の学び舎にするという提案を打ち出した。また、Cチームは、まず地域の人々の困っていることをサポートすることから始めたという気持ちから、活性化同好会や井川農業体感ツアーという有志の活動を提案した。

それらを提案することになった視点やいきさつは、本稿の後半に「学生報告書」（P297～308）としてまとめているので、そちらをご覧ください。

二十歳になるかならないかの経験値の少ない学生たちが、活性化を目的に提案をするといっても、容易なことではないことは予想している。だが、地元の方々に話をうかがいながら地域に寄り添った提案を目指し、継続し蓄積していくことが今の我々にできることだと考えている。

2-2-3. プレゼンテーショントレーニング

スライド作成時での注意点 「井川渡船活性化プロジェクト」での学生の活動は、A・B・Cの3チームが事前調査から現地フィールドワークまでを行い、それぞれのプレゼンテーションを作成することとした。

まず、各チームのスライド作成時では、次のような注意点をあげ進めた。

- ① 現地調査でのヒアリング時の生の声を、出来るだけ多く取り入れるようにする
- ② 現地での画像を多く使用し、それに関連した説明を加える
- ③ スライドは15枚程度の範囲でまとめる
- ④ 現状・気づいた点・チームとしての提案の順序でまとめる
- ⑤ 聞き手にもわかりやすく、インパクトのある興味深い内容とする
- ⑥ 文字の大きさ・種類・色に変化をつける
- ⑦ 画像表示には、アニメーション効果をつける
- ⑧ 特に、最後の提案には、自分たちの考え・アイデアをわかりやすい言葉で説明する

具体的には、学生目線での発想・アイデアを基に、井川地区活性化という地域課題の解決方法を出来るだけわかりやすい形で提案をしていかなければならない。そこで各チームに伝えたことは、常に発表での完成イメージを持ちながら、制作することが重要であるという点である。

発表練習時での注意点 スライドの作成が完成すると、いよいよ本番を想定した発表の練習をしていく。チームでの役割分担を決めて、発表者・PC操作者やレーザーポインタでの指示を誰が行うかを決めていく。試行錯誤しながら、担当を決定していく。発表の練習から本番の発表までの注意点は、次のような事柄があげられる。

- ① 発表用原稿を用意して、それを共有しながらタイミングを計っていく
- ② 発表者は、会場に合った声の大きさで、ゆっくり話すよう心掛ける
- ③ スライドの出るタイミングと話す内容を一致させる
- ④ 特に強調したい時は、スライドの変化と声で聞き手を集中させる
- ⑤ レーザーポインタ操作者は、発表者の説明に合わせて指示していく
- ⑥ 全体の時間配分をはかる
- ⑦ アニメーション効果を使った箇所は、その効果を確認しながら話す

発表練習では、スライドショーを行いながら、それに合わせて声を出して、全員で確認しながら調整していく。これを何回も何回も繰り返し、完成に近づけていく。ここで重要なことは、メンバー全員で意見を出し合い、発表の技術的な事柄を決めていくことである。つまり、発表者だけでなく、他のメンバーの意見・感想を聞くことが大きな成功要因を導くと言える点である。

実際の発表 井川小中学生をはじめ、地元の方々の約50名が、静岡市井川支所に集まった。発表会は盛大に行われた。当日は地元紙の新聞記者も駆けつけていた。3チームとも大きなミスもなく練習どおり順調に進んだ。井川に住んでいる人達と、地域課題の解決に

向け、取り組んだ結果が上手に表現されていたように思われる（画像 2・3）。

画像 2 Bチームプレゼンの様子



画像 3 Cチームプレゼンの様子



その後、参加者との意見交換が活発に行われた。しかし、まだまだ検討して詰めていかなければならない問題が山積しているのは事実である。

2-2-4. 事後学習 住民評価と学生のふりかえり

本プロジェクトを単に楽しい体験で終わらせないためには、「ふりかえり」の場面を設定することが重要である。学生に学びの深化を実感させ、さらには未来への改善活動につなげるため、成果発表会時に住民評価の機会を設けた。実社会の生きた声、厳しい声にも接したうえで、学生は自己評価（達成度）となるふりかえりを行った。

2-2-4-1. 住民評価・ジャッジシート

学生の事後学習の目的と、住民との関わりを増やした地域連携強化のため、参加住民全員にジャッジシートを配布し、成果発表会時に学生チーム発表内容における評価を求めた。各チームに向けた住民からのコメントには、地域の人々の率直な意見のほか、学生が真摯に向き合ってきた成果としてのさらに一步深まるような新たな情報なども多く提供された（図 2）。また、これらのコメントは成果発表会后、学生全員に送付された。

[illegible][illegible]

学生の学びを深めるため ふりかえりシートを作成・配布し、本プロジェクトにおける

研修内容の達成状況と自己評価を記入させた。今回のような短期実習では、教育効果を測定することは困難であると考えられたため、質問項目は本プロジェクトにおいて必要とされる能力要素を「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」「基礎的・汎用的能力」の中から選定（一部融合）し、表4で示す7項目とした⁽³⁾⁽¹⁴⁾。

| 能力要素 | 質問項目 |
|------|------|
|------|------|

| | |
|------------------|---|
| ①情報収集力 | プロジェクト遂行に必要な情報を収集できたか |
| ②計画・実行力 | 定めた計画通りに実行するだけでなく、適宜計画を修正しながらチームの活動をより良いものにすることができたか |
| ③企画・創造力 | 収集した情報や体験に基づいた質の高いアイデアを提案できたか |
| ④柔軟性・情況把握力 | 自分の役割を果たすだけでなく、困っているメンバーの手伝いができ、チーム活動での課題を見つけた時、その解決のためにメンバーに働きかけられたか |
| ⑤プレゼン力 | 発表内容のわかりやすさ、起承転結が明確で結論に対する理由を説明するのに必要な情報を示すことができたか |
| ⑥地域住民とのコミュニケーション | 地域住民のかたがたとコミュニケーションがとれたか |
| ⑦行政担当とのコミュニケーション | 行政の担当者とのコミュニケーションがとれたか |

次に、自由記述の3項目、①「今回プロジェクトを通じて習得することができたこと、発見したこと等を教えてください」、②「今回のプロジェクトにおいてできなかったこと、次の課題として取り組みたいことを教えてください」、③「今回のプロジェクトを通じて分からなかったこと、質問したいことを記入してください」について回答を求めた。最後に、上記ふりかえりの自由記述に対する学生のコメントや意見については、教員からフィードバックを行った。

2-2-4-3. 学生の自己評価における基礎的分析結果

前述した7つの質問項目の自己評価は、5件法により評定された回答について「とてもそう思う」を5点、「まあそう思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりそう思わない」4点、「まったく思わない」を1点として数値化した(表5)。

質問項目の平均値は、表5に示すとおり3.44から4.00までの間に分布している。ここでは、得点が高いほど、達成度が高いということになる。平均値の高い項目は「情報収集力」($M=4.00$, $SD=.87$)であった。一方、低い項目は「企画・創造力」($M=3.44$, $SD=1.24$)、「プレゼン力」($M=3.44$, $SD=1.01$)、「行政担当とのコミュニケーション」($M=3.44$, $SD=1.13$)であった。

表5 質問項目の基礎的分析

| 能力要素・質問項目 | 平均値：M | 標準偏差：SD |
|-----------------|-------|---------|
| 情報収集力 | 4.00 | 0.87 |
| 計画・実行力 | 3.67 | 1.00 |
| 地域住民とのコミュニケーション | 3.67 | 1.00 |
| 柔軟性・状況把握力 | 3.56 | 1.01 |
| 企画・創造力 | 3.44 | 1.24 |
| プレゼン力 | 3.44 | 1.01 |
| 行政担当とのコミュニケーション | 3.44 | 1.13 |

3. まとめと今後の課題

3-1. まとめ

現地調査での成果として、学生たちにとっては、井川というひとつのムラ社会へ外部者として入ることの作法や不文律を学べたことではないかと思う。意外にも、ものおじなく地域の人々に次々に聞き取りをしており、「何かはつかんで帰らねばならない」状況下にあったことにもよるが、観光客や地域の人々のコメントのポイントはよく書き留めていたのではないかと思う。歩いて見聞したことからチームごとに考え、自分たちの視点を榨り、できることを実行した。これまで関わった地域の人々の話に耳を傾け、相手の立場に立って考えるという貴重な機会を得られたことは大きい。

本プロジェクトで初めて運命共同体となったチーム内での連携は、遠慮もあってか少し距離感があったように見受けられた。プロジェクト外でもチーム間で議論をするようになればと思った。

一方、教員は報告書作成の段階で、各チームリーダーとのメールでの頻繁なデータ交換

や添削をしたことで、学生の思考や社会性の有無などを知ることができた。

行政との連携はよくとれていたと思う。井川の概観から聞き取り者の選定に至るまで、担当者が学生に寄り添って相談にのっている様子が学生報告書からもうかがえる。教員とのメール連絡も迅速に対応していただいた。「産官学住」それぞれの連携を重視して本プロジェクトを継続していきたいと思っている。

3-2. 今後の課題

3-2-1. チームビルディングの導入と教員のファシリテーション能力

基礎的分析結果からは、学生の取り組み姿勢が高いことが示されたが、チーム間での活動においては、差異が観察された。今後、PBL型授業を実施する際には、はじめにチームメンバーの相互理解を高めるためのプログラムを実施する必要がある。チームワークを強化するためには、授業外にもチームメンバー同士が直接会う機会を増やし、話し合いを意識できるような働きかけの必要性もある。チームビルディングの導入によって学生個人の達成度が高まることも期待できる。

また、学生チーム内におけるプロジェクトマネジメントが不十分と観察される場合には、教員・指導者らの積極的関与が必要となる。教員らのファシリテーション能力の向上については、今後の課題としたい。

3-2-2. 継続的な取り組みの必要性

本プロジェクトの実施期間としては、半期という短期間での課題解決は困難でありながらも、課題解決事業への取り組み姿勢として「課題を発見し、解決まで辿り着きたい」という学生の意識と、実際に地元の方々の意識としての高い期待と「たったこれだけの期間で、学生に解決できるのか」という部分が、ミスマッチを起こしてしまったような現象も確認された。信頼関係の構築には時間がかかる。それゆえ、継続的な地域課題への取り組みを通じて人間関係形成能力を向上させる教育プログラムの開発が望まれる。可能ならば、1年次からのアクティブな学びと学年を超えた人間関係作りを行い、年度を超えたプロジェクトを実施することでこれらの課題解決へとつなげたい。

このようなPBL型授業の取り組みによって、チーム内で「やるべきこと」すなわち“役割”を学生に意識させることが可能となる。学生の「やりたいこと」だけでプロジェクトを遂行するのではなく、学生自身の「やれること」、チームや社会の中で「やるべきこと」をも同時に考えさせることで、バランス感覚に優れた学生を養成していきたい。

謝辞 学生報告書をまとめるにあたり、直接お話をうかがった方をはじめ、井川の多くの方々にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

1. 浅野栄一 (2013) 「『よそ者、若者、大学生』と過疎地域活性化におけるその役割と教育効果～摂南大学PBL学生プロジェクトの実践を検証する～」『大学教育と情報』2013年度 (2), pp.16-19.
2. 大谷信介ほか (2013) 『新・社会調査へのアプローチ論理と方法』 ミネルヴァ書房

3. 経済産業省 (2006)「社会人基礎力に関する研究会 一中間取りまとめ」
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (閲覧日2016年9月26日)
4. 佐藤郁哉 (2002)『フィールドワークの技法』新曜社
5. 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース編 (2011)『平成23年度フィールドワーク実習報告書 静岡県葵区井川』
6. 松田民俗研究所編 (2004)『井川雑穀文化調査報告書』井川雑穀文化調査委員会
7. 静岡市無形文化財保存団体連絡協議会編 (2012)『山に生きる人々の知恵 一大井川最上流部の民俗文化ー』
8. 気象庁データ (2016) <http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/obsdl/#!table> (閲覧日2016年10月13日)
9. 静岡市 (2016) 5歳階級別人口統計 (井川地区) http://www.city.shizuoka.jp/000_001587.html (閲覧日2016年3月31日)
10. 中部地域大学グループ・東海Aチーム (2014)『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』
11. 中條暁仁 (2011)「静岡市中山間地域における集落の存続と『限界化』」『静岡大学教育学部研究報告1,人文・社会・自然科学篇』静岡大学教育学部 pp.65-78.
12. 西道実 (2011)「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」『ブール学院大学紀要』51, pp.217-228.
13. 廣川桂子, 大嶋玲未, 宮崎弦太, 芳賀繁 (2016)「大学生の社会人基礎力における因子不変性の検討」『立教大学心理学研究』58, pp.1-11.
14. 文部科学省 (2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 ～児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために～」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf (閲覧日2016年9月28日)
15. 静岡市登呂博物館編集・発行 (1997) 図録『祖父母から孫に伝えたい焼畑の暮らしー静岡市井川の老人たちが語る山の人生ー』
16. パンフレット (2013)『南アルプスエコパーク オクシズ 井川の魅力』静岡市環境局環境創造課

執筆分担

外立ますみ 2-1, 2-2, 2-2-2, 3-1, /戸田里和 1, 2-2-4, 3-2,
/薮崎栄 2-2-3, /池山眞一 2-2-1,

学生報告書 2016年

インタビューのまとめと提案

Aチーム
森野 あすか／斎藤 真衣／中島 愛佳

はじめに

私たちAチームは、自分たちの足で井川を歩き回り、住人でも観光客でもない、第三者的な視点から井川を観察することで現状を知り、多くの人が井川に訪れてくれるための改善点やよいところを明確にし、井川が活性化するための案を練ることにした。

以下、Aチームがインタビューを通して聞いたこと、自分たちの目で見えづいたことなどをまとめたものである。

1.地元民に聞いたこと

(1)井川本村 住人 (11/19 本村住宅前)

宿泊先である民宿やまいちきんを中心として井川湖周辺を廻っていた際に出会った人。以前は愛知県で仕事をしており、定年退職をしてから井川に戻ってきた。

井川には観光客が来るか、とお話をうかがったところ、「観光客は春から秋にかけては来るが、冬は道路の凍結などで峠を超えるのが難しく来ない」とおっしゃっていた。都会の人たちは、井川のように自然にあふれていて、民家も歴史があり、静かで、野菜類など自家栽培しているという暮らしが珍しく興味を持つ。だから、井川の暮らしについて説明したり、農作業などを体験させるとよい。だが、少しでも相手に知識がないと説明してもわからないこともある。

景観のよいところはどこか、とうかがうと、「周りは山しかないが、11月頃は紅葉していて、とくに白樺荘のある奥の方が鮮やかで綺麗だ」とおっしゃった。他には、夏はトウモロコシの栽培が盛んで、今までトウモロコシを使った食品加工の試みが行われてきたが、効果が出るかはわからない、あとはあるとしたらお茶畑くらいだとおっしゃっていた。

(2)南アルプス井川ビジターセンター

にて (11/19)

夏休みなどの長期休みになると、子どもと一緒に井川に来る観光客が多くなる。春から秋にかけては、主に中高年の方がハイキングや登山をし、マラソン大会などのイベントの時には、地元の人が集まって打ち上げを開くのにも利用して



以前「えほんの国」だった
南アルプス井川ビジターセンター

いる。小学校の行事で、6年間を通して数回だけだが児童が来ることもある。以前ここは「南アルプスえはんの郷」という施設だったこともあり、普段は今も置いてある絵本を読みに来たり、借りたりする人がいる。若い人たちは、中学を卒業すると、高校がないため井川から外に出てしまいほとんど戻ってこない。多少は戻ってくる人もいるが、新卒で戻ってくるのではなく、他の地域で一度就職してから戻ってくる。

(3)はしとら商店 森竹史郎さん (11/19)

お菓子、飲料類、洗剤など日用品を販売する商店。買い物に来る人は少なく、お菓子を買いに来る子どもも多い。井川に子どもが少ない。土日だと静岡の街中に出かけてしまうので、人通りもほとんどない。

今は、工事関係者が朝と夕方に店に来るが、お客さんが少なく廃業になるものもある。一番売れているものは飲料である。高齢者など動けない人が多いので、電話で注文が来たら配達をしている。

観光については、渡船だけで人を呼ぼうと思うのも難しいので、渡船と渡船以外のものを組み合わせた何かが必要。井川湖は冬の溺水に加え、下流の水量を調整するダムなので、常に一定の水量があるわけではないから一年中運行することはできない。

(4)井川観光協会会長 森竹史郎さん (11/19 民宿やまいちにて)

上記のはしとら商店店主、アルプスで山小屋を経営している。

井川まで来るアクセスがよくないので、リピーターをつくりにくい。道路の状況もよくないうえに、交通の便が悪い。道を改善したら、今までは泊まり客が減り、日帰りで帰ってしまうようになった。それでは、道が悪かったのが人が留まっていたに過ぎない。自家用車の増加により、交通機関の時間を考慮する必要がなく、泊まらなくなったともいえる。泊まり客が減ったことで、観光地から一歩後退した状態になった。

また、観光客が定着しないということは、井川の人たちのもてなし方に問題がある。田舎の人は、人が来ると嬉しくなり、普段の生活の中で食べられないものを提供する。地の物を使った料理や井川で昔から食べられていた料理を提供すれば良いのに、豪華にしたがる。ただ、もてなそうという心はある、人の良さを感じられる。

井川に自宅があり、市街地などに家を持つ人もいる。そのため、普段空いている家はあるが、私畑を欲している家もあるので他人に貸すのは難しい。完全に家の中に何もなくなったら空き家ではない。

(5)喫茶スナックみゆきにて (11/19 22時)

ビクターセンターで働いている宮崎みゆきさんの妹が経営、井川で唯一のスナック。

普段は、電話がきつてから店を開けるので、いきなり行っても聞いていないことがある。私たちが行った時には、ビクターセンターのみゆきさんに、(お店に)行くかもしれないと伝えてあったために、店を開けて待っていてくれた。

店を立ち上げた当時、よく来てくれた常連さんは、現在70歳くらいになり、年金で生活している。今は店に足を運んでくれる人が少ない。スナックのママが小学生の時は、井川小学校は1クラスに40人くらいいるが、2クラスあるのが普通だった。しかし、息子の時は人数が少なくなり、同級生が4人だけだった。だが、息子の時も今も人数が少ないためか、生徒同士男女関係なく仲がよく家族同然であった。

2.観光客に関したこと

(1)50~60代くらいの夫婦 (11/20 10時半)

静岡市内在住の夫婦。井川には初めてきた。廃線の途中まで一緒に行動。廃線を歩くことは滅多にできることではないからとてもよい。歩きながら紅葉を眺めることができ、綺麗だと喜んでた。また、岐阜県にあるような、廃線の線路の上を専用の自転車でこいで進むトロロッコを導入してみたらどうかと提案された。

(2)家族連れ 井川大仏にて (10/20 11時)

清水区在住の子どもの家族が2組で来ていた。大人4人、小学生以下が4人である。

井川のこと、テレビや新聞で見たのと、静岡市のホームページに掲載されていた情報を見て来ることにした。紅葉を見ることが、渡船に乗ることを目的に、自家用車で来た。廃線歩きながら、紅葉を見たり、湖を見たりできてよ



廃線小径と日守ム

湖端にある唯一のトンネル

湖端小径から見える井川湖

かった。
自然や景観が綺麗なので、景観を損ねるようなレジャー施設や建物などはない。だが、一軒でもコンビニがない。あと、飲食ができる施設が欲しい。あつてもうどんや蕎麦で、小学生の好みそうなものがない。井川にはコンビニがないので、弁当を持って行く必要がある。コンビニなどでは十分に楽しめるが、子どもたちが遊ぶ場所がなくて飽きてしまう。

3. 私たちが気づいたこと

(1)井川湖 高台から見ると、山の紅葉や家の軒並みも井川湖と一緒に見渡せるので、井川に住んでいる人の「ここから見る景色はおすすめ」「ここからなら全貌が見える」などといったお薦めのスポット紹介があっても面白いと思った。湖に木や落ち葉、ごみなどが溜まっていて景観上よくないように思った。堤防や湖の近くを歩いている時に、湖を覗き込むと溜まっているのが見える。

(2)渡船 渡船に乗ると缶バッチが配布される。何種類かあるので子どもたちがどれにしようかと悩んだり、家族でそれぞれ違うものを選んで、記念の品になると思った。

14時半井川湖堤防、14時55分井川本村着の渡船に乗ったが、出発時間、到着時間ともに、掲示されている時間表よりも早かった。出発時に、「出発します」や「体を乗り出さないでください」などの声かけがあったので、安全面を考慮して言うのはいい。

渡船に乗っている時に、夢の吊り橋が見える場所があるが、遠すぎて写真が撮るには難しいので、夢の吊り橋に接近するコースがあっても面白いと思った。

渡船に乗る人や、堤防を歩く人の車によって、井川湖堤防の駐車場で渋滞が起きている。駐車場に入る道が狭



堤防から眺めた夢の吊り橋



吊り橋を渡っている途中 湖岸路の紅葉とAチーム

4

く、車が2台すれ違える余裕がなく、どちらかの車が止まらなければならないので、渋滞が必然的に起こってしまう。いっぽう、井川湖展示館の駐車場はあまり限られていないので、そちらの駐車場まで車が流れる順路を考えられたら良いと思った。

(3)渡船〜井川大仏 すれ違う観光客に挨拶をしながら歩いていたが、皆挨拶を返してくれた。また、「学校のサークル活動？」とか「何調べてるの?」「どこから来たの?」などと気軽に話しかけてくれる人が多くいた。このように気軽に話すことは教会に行くほど少なくなっていくので、とても新鮮に感じた。渡船を歩いている人の話を聞くと、皆、目当ては「夢の吊り橋」だと言っていた。吊り橋には彫刻があるのだと思う。現に私も、吊り橋を一目当てに歩いていった。吊り橋は、定員5名で、横幅は人が1人通れるほどであった。思ったより揺れはしなかったが、歩き終わった後に浮遊感を感じた。水面からの高さがかげがあり、高所恐怖症の人は渡れないと思った。また、渡船ではカメラを構えている人が多く、一眼レフだったり、三脚を持ち運んでいたりと、本格的な人が多い。歩いている人の中には、小艇を運んで渡り橋を歩く人もいた。だが、吊り橋に降りる道など、傾斜がきつくて滑りやすいので、犬が先に進んでいたり、走り出してしまうととても危ない。あと、面白かったのが、渡船には落ち葉がたくさん落ちていて、黄色や赤、茶色など歩くたびに色が変わっていくことだ。場所によって傾えられている木が違ってくるが、それぞれの葉に特徴があって見ていて楽しかった。

全体的に見て、私たちと同年代の若い人はおらず、40代や50代以上の人が多く感じた。蒲葦から来ていた80人くらいの団体がいたが、年齢層は高かった。また、子どもには、吊り橋やトンネルなどがあるが、景色を見て歩いているだけでは飽きてしまいそうだったと思った。

(4)井川神社と原校の井川小学校 井川神社までの参道は、傾斜がきつくて途中まで車で上がったとしても足腰の弱い人には大変だと思う。手すりがない、枯葉が多いのでとても滑りやすい、雨の時に参拝しようと思う人はいないと思うが、参道の坂道に苔が生えていて滑っていると滑る。ただ、神社まで登る途中にある小学校からの一瞥と、細木の木の紅葉はとても綺麗で見ごたえがある。渡れども見る価値があると思う。



小中学校統合で閉鎖された井川小学校

(5)富士見峠の朝市 本村から行くには、峠に向かって登っていかねばな

5

らなくで、自家用車がないと自主運行バス「でしやまんくん」しか交通手段がない。



朝市会場から見える南アルプスの雲化野

このバスが富士見峠を通過する時間は、8時31分と16時16分着で時間が中途半端である。富士見峠には、自家用車で来ているか、ツーリングをして苦んでいる人ばかりである。この日に開催された朝市で販売しているものは、蕨肉、野菜、和菓子、お茶、漬物などで、野菜は価格が安い。朝市だけでなく、南アルプス連山や富士山が見える。秋から冬にかけては、山々に雪が積もっている姿を見ることが出来る。



本町の店や朝市で販売しているメンバ餅中

(6)その他 朝市で会った人に盛線で会ったり、慶縁で会った人にピジターセンターで会ったりと井川内を廻っている人が多いと思った。現地調査をした土日は、雨と休日のせいもあり、本村を廻ってみてもほとんど人に会うことができなかった。本村を廻ってみて気づいたことは、鹿の角が住宅の板壁一面に飾ってある家があるということだ。民宿にも、部屋の中に鹿の剥製が飾られてあった。鹿の角は、なかなか見る機会がなく珍しいと思ったので、何かイベントごとなどに使えるのではないかと考えた。



民宿や直ぐちにある鹿の剥製

インタビューを通して気づいたことは、静岡県内から来た人が多いことだ。車のナンバーを見て、静岡や浜松、県外だと、横浜、静岡、名古屋ナンバーが目立ち、近郊から来ている人が多い。近郊だけでなく、遠方の観光客にも来てもらえるようになるには、やはりSNSを使

い、情報の拡散をして井川について広めていくべきだと思う。だが、井川は場所によって電波が届かない。

4.課題と提案

(1)井川湖の流水やごみの清掃を提案する

富士見峠で行われているツーリング作戦のように、広瀬などの地域紙を利用して呼びかけたり、大学などに呼びかけをして多くの人が参加する機会があれば良いと考える。ただ、船を出して清掃をするというのは危険を伴う可能性があるもので、人数が少ない時期に実施するのが望ましい。

(2)「子どもが飽きない、ファミリーで楽しめる工夫」を提案したい

どんなに家族連れの人々が「楽しかった」「また来たい」と思ってくれても、子どもが「つまらない」「もう来たくない」と思えば、再び来ってくれることはなくなってしまう。そこで、私たちがあげた提案は二つ。

(2)-1 「スタンプラリー」

朝市や慶縁、ピジターセンターなどで行っているいろいろな場所と同じ人を見かけるところから、井川を巡り歩いていることがわかった。だから、歩きながら楽しめるものをとするということで、スタンプラリーを提案する。とくにルートを決めずに、スタンプラリーを行う人が好きに次の場所に移動できるようにすれば、バスで来ている人でも車で来ている人でも関係なく楽しめると思った。スタンプを置く場所としては、慶縁乗り場、ピジターセンター、慶縁ウォーキング道など。普通に観光にしても通る道だけでなく、本村の鹿の角が多く飾ってある家などもスタンプ地点にしてもおくと、新しい発見があると思う。井川の簡略化した地図にスタンプの置いてある場所を示しておき、各スタンプ置き場で配布できるようにする。この地図にスタンプを押せるようにする。ただ、すべてのスタンプの場所がわかっていてはつまらないので、クイズを解かなければ場所がわからなくなっているような工夫をする。全部のスタンプ地点が書いてある地図も用意する。

慶縁では、船頭さんがスタンプを押してくれる形にすれば、船頭さんと観光客の方との交流がはかれる。

また、各地点でスタンプの図柄を変え、図柄は、井川と文字が入っている。鹿や熊などの動物がいるので動物にしたりして、工夫するのも楽しい。渡船で配布されている短パンチや、お茶ソフトからりんどうのように、地元の子生とデザインを考えれば、店や施設の関係者以外の方々も、観光に携わることが出来る。そして、スタンプがすべて集まったら、ちよつとした景品を用意する。その景品は、井川の地域産品でも割引券などの大人が喜ぶようなものと、子どもが喜ぶようなおもちゃ、お菓子など選べるようにする。例として、食品なら夏前あたりなりなりトウモロコシ、秋には椎茸やなめこといった干し茸や山菜類、朝市

井川現地調査報告

日 チーム
松浦 歩里／池田 奈菜／大場 豊

はじめに

集中講義「井川渡船の活性化プロジェクト」の一環で、11月19日（土）・20日（日）の2日間の現地調査と、12月17日（土）・18日（日）の2日間の補充調査で井川に行った。そこで歩いて見て体験したことをまとめた。

1. 第1回 現地調査でのインタビュー

(1) 井川支所 加藤一さん (12/19)

井川を訪れる人々 静岡市街地から北に40キロの位置に井川地区がある。11月の紅葉シーズンには、1,000人くらいは観光客が訪れる。井川を訪れる人は観光客、井川自然の家に来る中高生、中部電力の工事の関係者の皆さん等がある。こういう人たちは、町から通勤したり、本村にある家や社宅に住む人、また平日は井川で寝泊りし、週末に町の自宅へ帰る人もいる。

紅葉マラソン 井川の主要な観光イベントとして、毎年10月中旬に開催される紅葉マラソンがある。当時の連合町内会長が井川の人々を盛り上げるために企画した行事で、最初は地元の高中生、中部電力の工事の関係者などが主で、今もみじマラソン実行委員会（南アルプス井川観光会館内）が主催しており、回で33回目を迎える。当初はコースを本村の中に設定したため、紅葉を見物に来る観光客との混雑がひどかった。そのため、現在は井川スキー場近くの、山の尾根を走るコースに変更された。

ダム渡船について 井川ダムが完成した昭和32年9月より村道等が水没したため、井川地区住民の対岸交通を確保することを目的として、ダム完成の翌年、昭和33年から井川渡船事業を開始した。

渡船の運営 ダムは中部電力が運営し、渡船は井川森林組合が管理運営している。また渡船の維持管理費は100%静岡市が支出しており、年間2,300万円にも及ぶ。

井川の観光情報を得るには 南アルプス井川ビジターセンター内に井川観光協会がある。ここにはさまざまなパンフレットやリーフレット、地図などが置かれており、観光客が三々五々、訪れ手にしている。また、情報収集などの手段として町内などの考えられ、使え場所には、スキー場とビジターセンターの2地点のみだという。なお、井川のイベントなどの情報は、「井川情報ステーション」としてホームページで発信している。

教育施設について 幼稚園は子どもがおらず休園している。平成28年4月7日から小学校と中学校が統合して井川小中学校となり、これまでの中学校の校舎を使って小中学生が一緒に学んでいる。また、井川地区内には高等学校がな

9



お茶ソフトカトル

やアルプスの里で販売していた「力納」を原品にする。おもちゃは、井川の木材を使ったものが作れたらと思う。さらに、歩く場所を井川の豆知識や「てしやまんくの話」などを掲示する。

(2)-2「アスレチック」

井川の自然を生かして、子どもから大人まで楽しめるフィールドを用意する。場所は、井川小学校のグラウンドのような広いところを考えている。フィールドには、太い木の枝を丸くして、ブランコにしてみたり、木材を使ってジャングルジムのようなものを作り上げる。井川の森林組合の方や、私たち学生が協力して、少しずつアトラクションを増やしていくければよい。アトラクション作りに、観光客の方も参加できる形でも面白い。木や植物などに触れる機会や、山の中などを走り回る機会というものは今の時代、そうそうできるものではない。大人でも昔はよく外で遊んでいた、と懐かしそうだったり、子どもは新しい発見ができると考える。

また、井川では犬を連れて観光に来ている人が多く、散歩を犬と共に歩いている人もいた。だから、犬も走り回れるドッグランの要素もあれば楽しいと思っただろう。そうすれば、子ども連れの家来犬だけでなく、ペットを連れて観光に来ている人と、観光に行く時にペットに留守番をさせてしまっている人などの、ペット連れのリピーターも期待できる。犬を連れてきている人には、犬と遊べるように、トンネルや小きめのハードルを用意する。ここで、犬のパフォーマンスの会を開催し、人が集まれるきっかけになる。以上が、私たちAチームが提案する井川の活性化、改善案である。

終わりに

初めて井川に来たが、思っていたよりも面白かった。普段の生活では、学校へ行ったり、課題をやったり、アルバイトをしたりと、忙しくしているため、静かに時間が流れているように感じている井川とはとても落ち着いた。また、渡船を歩いたり、渡船に乗ったり、あまりできない経験ができ、新しいことに触れることができた。調査とは関係なく、井川に遊びに行きたいと思った。井川は、観光の資源となるものが多いので、それらの使い方を工夫すれば人も来てくれると思う。私たちの調査が、井川の活性化に役立つことになれば嬉しい。

8

いため、高校生になると井川から出て行かなければならない。閉鎖された小学校の校舎の活用方法が現在検討されている。

(2)井川森林組合組合長 森竹史郎さん (11/19)

井川について森竹さんはこのように紹介された。また私たちの質問にも快く回答していただき大変貴重な時間となった。

こ井川は傾りになる若い人が少ないことで、自分たちが現役でやらないのは困るが、ばという気持ちがあるのではよいかもしれない。後継者がいないのは困るが、逆にいないということがよい効果を出しているのかもしれない。

井川自然の家と渡船のイベントができればいいと思っている。渡船は現在、無料だが有料化してしまおうと細かな所まで指図を受ける可能性がある。「安全第一」はいうまでもない。

井川までの交通インフラが整備されていない。交通の便がよくなったら逆に日帰り客が多くなってしまう。観光客を井川に呼びには、ただ景色が綺麗なだけではなくて、何か井川にしかないものや興味を惹くものが必要。観光客の宿泊型のプランを考えていただきたい。(これについてはプロジェクトの中に盛りこもうと考えている。)

井川を活性化するには、なるべくお金のかからない提案をお願いしたいとのこと。井川に住んでくれるような人材が欲しい。耕作放棄地が多いので、若い人たちが農業をしに来て移住して欲しい。

さらに、情報通信などを利用して井川の周知度を高めたい。だが、本村には電波が届きにくい場所もある。そこで逆転の発想で、電波が通らない所でデッドックス生活をしてみようかと先生たちが提案した。

現状は、どの施設や作業に対しても、スタップが足りない。夏休みに働きに来ることは大歓迎！例えば、森林の手入れや伐倒などがある。井川で昼食をして居てくれる本はナラ材が有名(他にも、スギ・ヒノキがある。)

山には動物が多い。現在、鹿・猪・熊(ツキノワグマ)等の餌が行われているが、鹿や熊が立木を剥く被害が深刻だという。熊は希少なので捕獲することが少ない。

鹿や熊の肉を食品に加工して利用しようとしても、食品衛生法により、捕って2時間以内には解体して調理しなければ許可がおりず、加工などには現地に加工場がなければ不可能に近い。

昔は、地元の木を使って家を建てるが多かった。その土地で育った木が一番その地域に適している。地城材として使用されていた。今は、組立式の家が多数、建材も遠くから加工を施したものが手軽に出回るようになり、地元の木はあまり使われなくなっている。井川に住みたくなくなるような提案を是非していただきたい。

(3)「アルプスの里」で働くお母さんたち (12/19 星垣)

井川の西山平地区には、蕎麦やカレーなどの食事ができ、ちょっととした地場

産品やお土産も購入することができ、アルプスの里」がある。

この建物は「JA(農業協同組合)の所有で、婦人部の人たちが食事を提供している。月曜が定休日。

アルプスの里でお昼を食べながら、ここで働いているお母さんたち4人(青木須美代さん、栗山佐代子さん、望月はるみさん、森竹ゆきえさん)からお話をうかがった。この辺

では観光客や地元で働いている人たちが食事をするところがなく不便だったため、食事を提供できるアルプスの里をつくったとおっしゃっていた。

メニューを紹介 食事のメニューには、天ぷら蕎麦、山菜蕎麦、やまめ蕎麦、かつ丼、カレーなどがあり、酢漬、なめこ、山菜など、井川で採れた食材が主に使われている。なかでも、1日5食限定のダムカレーは、開店と同時に完売するほどの人気メニューだ。

お客さんについて 夏・秋は観光客が多い。平日ここに来るお客さんは井川で働いている人が多い。普段は2人で運営しており行楽シーズンには増員する。話をうかがった当日は、イベントの注文を受けて50食もの弁当を作り終えたばかりだった。

2.現地調査で訪れたところ

(1)井川渡船 船を得る場所にて

船上から地景紅葉を見るために訪れた。渡船乗り場の脇には2階建ての建物があり、その1階部分の壁(ひさし)のまわりにはベンチが4つほどある。待っている間も紅葉が見え景観もあるのでいい雨でも濡れない。

この建物の2階には中部電力の社長が視察に訪れた際に使うための和室があるが、使われることはほとんどないそう。ここを渡船の待合室などに活用できないだろうか。

渡船乗り場の時刻表の看板は木造で大変見栄えがするが、実際の時刻表自体は小さな紙の印刷物をテーブルで留めただけのものです。釣り合



1日5食限定の「ダムカレー」
ご飯の上にはゆでたカボチャやひのき

渡船時刻表

| 本村→井川渡船 | | | |
|---------|------------|-------|--|
| 船名 | 出発時刻 | 到着時刻 | |
| 赤石丸 | 9:50(大橋経由) | 10:35 | |
| 第二丸 | 12:05 | 12:30 | |
| 第二丸 | 13:50 | 14:15 | |
| 赤石丸 | 15:15 | 15:30 | |

| 井川渡船→本村 | | | |
|---------|-------------|-------|--|
| 船名 | 出発時刻 | 到着時刻 | |
| 赤石丸 | 10:50 | 11:05 | |
| 第二丸 | 12:45 | 13:10 | |
| 第二丸 | 14:30 | 14:55 | |
| 赤石丸 | 15:45(大橋経由) | 16:30 | |

※本村→宮向 は申し出により臨時出航

いがとれていないと感じた。

(2) 赤石丸乗船 (12/20)

私達が赤石丸に乗った時は雨上がりが、紅葉は評判どおりで絶景であった。船上では「ちびまる子ちゃん音頭」が流れた。調子のよい歌だった。

船には屋根があるが、前後左右はオープンで360度パノラマの紅葉を羨しむことができる。私達が乗船したのは、井川瀬堤から本村までの航路であったので、井川大橋まで行くことが出来ずに残念であった。

写真を見るとわかるように、屋根の下部に透明なビニールが巻き上げられて、これを下げれば風除け、寒さ防止にもなると考えた。前後にも設置したら殆ど寒さを感じないかもしれない。屋根は数か所を縫ってあるので脱着可能だ。船頭さんはそのような脱着は時間が必要と考えられているようだった。井川小中学生の考案した線の図パズルをもらった。

(3) 物語 井川の里ばなし

本村には伝説的な物語の看板が設置されている。

てしやまんく物語 井川に生まれた男の子「てしやまんく」は、とても力持ちな赤石丸だった。子どもどもの時に月から落ちてしまったウサギを助ける心が優しい子でもあった。大人になっても「てしやまんく」は、加齢もあって親切な人だったのだから村の人々を助けた。

ある日、熊の町へ行った時、浅間神社の石鳥居を建てようとして、石工たちが何百キロもの石柱を舟に積み上げて運んで来た。石柱を建てようとして、石工たちが何百キロもの石柱を舟に積み上げて運んで来た。石柱を建てようとして、石工たちが何百キロもの石柱を舟に積み上げて運んで来た。



渡船赤石丸の屋根と透明ビニール



田代地区にある「てしやまんくの里」

てしやまんくの里が田代集落内にある。木の下に立てられている看板には、ここに三十人力の手番万九と、二十人力の力次郎前門が祀られていると書かれている。徳生婆(とくせいばあ)という人も飯炊きの力持ちとして伝説に残っている。

井川地区にはこの様に「力持ち」伝説が多い。これは、力仕事も何事も人に頼らず自分の事は自分でやるという風土慣習が根付いているのかなと感じた。

3. 第2回 現地補充調査

(1) 小河内集落 望月仁美さん・西川夫妻 (12/17 11時~16時頃)

今回は、小河内の堤頭ハウスにうかがい、参加した男性陣(学生)は薪割り体験、女性陣(学生と教員)は、漬物製作を体験した。

そのあと、機械でのヒエの精白を試みたり、ヒエの穂を手で揉んで粒を落とす作業をした。作業の終わりのころ、途中、静岡市中山間地域振興課の多々良典秀さんが加わった。



場で作らせてもらった郷土料理

(2) 船頭 栗下敏彦さん (12/18 11時~)

第2赤石丸にて湖を巡った後、下記の様なお話をうかがった。

井川渡船の活性化のため、渡船を利用し夏は「天の川風賞会」秋は「絶景紅葉、秋の星空鑑賞会」を計画、そのためには渡船の屋根を取り、壁を敷き寝転んで夜空が見られるように改造したい、との計画を語った。

それに対して、イースの祝着については固定されているので困難だということ根の取り外しに2~3時間かかるそうだった。また夜間運航も経験がないということだった。仮に夜間の運航をしようと、法に則った照明器具の新たな設備が必要となる。

井川渡船の見どころについてうかがったところ、絶景はもちろんだが船上からイノシシ、タヌキ等を見かける時がある。私たちは幸運にも山林にイノシシが2頭いる場面を目撃した。

船頭さんから、航路の途中に井川大仏が見られる場所があるが、木の茂密等の問題があり、現時点では船上から大仏が見られるようにするのは困難との事だった。

また、渡船に乗った時に流してもらった「ちびまる子ちゃん音頭」は良かった。日頃の地域住民の足で利用する時は流さない。観光客の要望により流すということだった。

その後、船頭さんたちに本村の渡船場事務所(待合所)を案内してもらった。(船頭さんは栗下敏彦さん、望月重雄さん、森竹繁さん、望月正人さんの4名)

(3) アルプスの里 代表 遠藤弘子さん (12/18 13:30～)

アルプスの里の運営と加工場 食堂は平成元年にJA婦人部によって設立され経営されている。要下みづつさんが初代代表を務め、二代目は海野さき子さんが4年前まで務め、現在は遠藤弘子さんが務めている。

以前は従業員が30人ほどいたが、現在では13人で運営している。その中でも常勤できる人は4人で、かつて中部電力で炊事係として働いていた森竹さんとは料理が大変上手なのでメインに頼んでいる。普段は毎週月曜日を定休日としており、そのほかに、お盆と年末年始(12/29～1/4)を休みにしている。

加工所でもあるアルプスの里は、以前は西山平地区の公民館だったもので(飯倉店らしい体裁をとってないかったの)で人りにくい、探しにくいという意見が挙がっていた。そこで分かりやすい入口を設けた。また駐車場入口に案内看板も設置した。

活性化と加工所での味噌作り 以前、市役所の地域活性化・地域経済課の人たちが(梅ヶ島地区のように)井川を梅の里にしようという提案をし、井川全体に梅の木を植えたりしたが、持続せずプロジェクトを断念したことがある。そこで、地域活性化をするべく何かをやろうと思い立ち、10年ほど前にお母ちゃんグループを設立した。お母ちゃんグループでは「お母ちゃん味噌」として、年間350kgの味噌を製品化している。一方で、仲間内での味噌作りもする。毎年1月15日ころから一週間かけて仕込みをしていき、29日すぎには仕込みを完了する。このお味噌は、「お母ちゃんのお味噌」とは別で作っている。

ここで使われる食材 アルプスの里は、昔は蕎麦専門店であった。それを4年前にリニューアルをした。リニューアルした時、元々あったメニューはなさず、カレーうどんなどを追加し、常置を所願した。アルプスの里で提供している食事については、材料は「地域でとれるものは地域で!」の考えのもと、漬物や特製の味噌などを作っている。地元にある食材で、采てくれた人が満足いくよう努力している。経験なども提供する料理に使えたらいいのではないかと、というお話もあった。

地域活性化をしたい このような地域の取り組みに遠藤さんは積極的に協力している。例えば、ちつきよう・みようがを収穫したら、保存しておくのに漬物にするとか。お茶の漬物は大量にはできないが、パッケージなどを工夫するとか…、提供できるようにいろいろ考えている。野菜を作っている人が多いのでおじいちゃん・おばあちゃんが作った物を出荷するなど。

実際に「お茶ソフトからんとう」を作りだして売っている。これは井川の中学生とアルプスの里のコラボレーションで作っている。これは井川の中学生とアルプスの里とのコラボレーションで、中学生が考案したものを婦人部で売ったものである(静岡新聞 2016.7.30に掲載)。

農作業の働き手が欲しい 遠藤さんからはどんな人が集まって欲しいかも教えていただいた。

まずは、畑で作物を作ることが必要とされているので、農作業や力仕事ができる男性が来てくれると嬉しい。「地域おこし協力隊」の杉本さんも様々に協力してくれている。

14

4. 私たちの提案

井川地区は限界集落、過疎化、少子化、高齢化、人口減等が懸念となっている中山間地の代表格のようである。しかし資源はどうだろうか。南アルプスの玄關口といえる自然に囲まれ、美しい紅葉を見ることができ、井川ダム、井川湖、渡船、遊歩道など、大井川から派生した水辺を楽しむことができ、大井川と野生動物との出会いもある。これらの魅力ある地域資源を複数コラボしてイベントを開催して交流人口を増やすことはできないだろうか?そして、将来的にはこの地が寂しくなった人が定住できるような道筋をつける、そんなプランを考えたい。そのためには観光客を呼び交際人口を増やすこと、そして地元の方々と観光客が交流している、そのような先取を作りたい。

私達は、井川の人達と一緒に取り組みめることも大事だと考え、以下の2つの提案をしてみたい。

(1) 渡船にて夜のイベントを行う

1泊2日のツアー プランの一つは井川渡船を使った夏の夜の川観賞会と紅葉時間の満天の星空観賞会をあげたい。(日中は渡船に乗船・ダム見学・廃線ウォーク等)

夏:「井川湖渡船で彦星と織姫に夢を抱く悠夏の夜の川観賞会」

(所有時間 30～45分)

秋:「井川湖渡船で絶景紅葉・星空観賞会」 (所有時間 30～45分)

(2) 渡船の看板について

渡船の看板 現在の看板(案内板)は、本体は木造でしっかりしているが、時刻表は紙製のものが粘着テープで貼ってあった。これをプラスチックボードに変更したらどうだろう。また、一般観光客に楽しんでもらえるように「てしやまんく」の絵を時刻表の看板の中にデザインしたい。

15



(3) プランを実現させるために

- ・渡船の所有者は静岡市であり、渡船の管理運営者は井川森林組合である。
- ・赤石丸の屋根を取り、空が見える形にする。(改造費用が必要)
- ・定期便後の貸切便の船舶操縦士の確保 (現在の船頭さん道にお願いする。)
- ・住民の皆さんの生の声に耳を傾ける。(宿泊施設・ビクターセンターまたは地元住民の皆さんも参加できるように働きかけをする。)
- ・旅行会社(静岡オレンジツアー・遠征パンビツアー等)へ「ツアー商品化」の売り込みを考えている。(平成 29 年度、本学で鑑賞会試験その結果をツアー会社へ報告。平成 30 年度、旅行会社によるツアー商品化試験)

上記のような事前準備、手回しが重要である。そのために船の改造や PR 活動が必要で、経費もかかる。(PR 宣伝活動はのぼり旗、ポスター、法被等を用いる。)

| | |
|-----------|-------------|
| ・PR 器具 | 1,500,000 円 |
| ・体験鑑賞会交通費 | 500,000 円 |
| ・渡船改造 | 1,000,000 円 |
| 合計 | 3,000,000 円 |

静岡市、藤枝市、焼津市、島田市、菊川市等の借役所、支所、JR 駅、JA 等に出かけ、街頭宣伝を実施する。これには産官学住の皆が協力しなくてはならない。本プロジェクトで最も重要な案件である。

井川実習報告

Ｃチーム
長内 晴大朗／四之宮 遥／高橋 知也

はじめに

集中講義「井川渡船の活性化プロジェクト」に参加した。井川について学ぶ事前授業を受け、11 月 19、20 日は 12 月 17、18 日に井川で現地調査をした。渡船とその周辺を活性化させるためには、渡船について現地の人から聞くことと地元の人々の生の声を聞くことが大切だと考え、多くの人にインタビューをしていただいた。

1. 第 1 回現地調査 インタビュー

(1) 糟谷欣一さん (11/19 14 時 白樺荘にて)

白樺荘に行った時、偶然お会いした糟谷欣一さんに話をうかがった。この方はもともと井川に住んでいた方で以前は井川支所でも働いていたそうだが、今(平成 28 年現在)は井川自然の家で職員である。メンバー 30 人ほどの温泉めぐりツアーに搭乘されて来ていて、休憩時間中にお話を聞かせていただいた。

船をメインのイベントと、ついでに船を利用してもらうという二つの案を提示して下さった。船でのイベントというのは「船上婚活イベント」で、利用客の増加を期待する 8 月～10 月に開催する。寒さが厳しい冬には「船上婚活」どころではないだろうが、暑い夏には風上を渡る風が心地よく、話も弾んで寒気も盛り上がるだろうとおっしゃっていた。船を降り、白樺荘で温泉に浸かり、民宿に宿を取ってもらうえば、より一層井川を楽しんでいただけるだろう。

「ついでに船を利用してもらう」というのは、蕎麦打ちや井川作物ツアーを実施し、移動手段として井川渡船を利用してもらうというものだ。欣一さんに「バスで移動し、蕎麦打ち体験をさせてもらう場所に行く間、渡船を利用し、井川自然の家で宿泊してもらい、次の日の朝に帰る」というツアーの案を提示していただいた。井川自然の家には 320 人もの宿泊ができ、ツアー参加者が多くても実施できる。

(2) 渡島寿満さん (11/19 民宿ふるさとにて)

白樺荘の帰り、民宿ふるさとに立ち寄り、渡島寿満さんにお話をうかがった。寿満さんは 町に出て働いていたが、十数年前に民宿を継ぐため井川に戻ってこられたそうである。現在は民宿経営と果とを産業としていているとのこと。山とダム湖があるこの地では渡船を川に追い込み、川に逃げた渡船を流して捕獲するのだそうだ。この地域の山には人の数より多くの鹿が生息しており主な獲物は鹿であるが、たまに熊を捕獲することもあるという。

これまで人を井川に呼び込むために様々なイベントを実施してきたが、なか

なか井川に住むようにはなっていないとのことである。井川に来るにしても、町に買い物をするため出るにしても道のりが長く不便なうえ、井川には仕事もないため、井川に定住することは困難のようである。

渡船については、年間通すと運行しない時のほうが長いようなので、渡船を利用してのイベントは難しいとのこと意見をいただいた。湯水期には水位が下がって運行ができなくなり、船の故障等で動かなくなる時もある。下流域が水量調整の役割を担うダムを優先するため、放流によって水位が下がり渡船に影響を受ける場面もある。このような不確実な要素が多いので、渡船を利用したイベントは困難であろうと指摘された。私たちは 年間を通して運行されるものだと思っていたので、認識不足を思い知らされた。

(3) 森竹史郎さん (11/19 19時 民宿やまいちにて)

森竹さんは、本村のはしとら商店の店主であり、南アールプスの山小屋の経営もされている。また井川森林組合長、井川観光協会会長などを歴任されている方である。私たちが泊まった「民宿やまいち」を訪れてくださった森竹史郎さんから、ご本人が井川にリターンされて以後 40 年にわたって地域の活性化に取り組んでこられた状況をうかがうことができた。

当初は交通事情が悪く、他地域から井川に来る人は行き返りに時間がかかるため、井川で民泊するしかなかった。最近では井川への道路が拡幅され、交通事情が改善し、日帰りでも往復できるようになった。そのため、かえって井川に泊まる人が減ったという現象も起きている。

そこで、自轉荘まで行くバスは到着時間と出発時間がほぼ同じである。もともとバスの本数が少ないこともあり、すぐには帰れないようにターゲートを閉じている。こうして、バスで移動する他地方から来る人に少しでも長く井川にいてもらい、民宿などに泊まってもらうというねらいもある。

これまで多くのイベントに関わってきたが、短期的には成功といえても、長期的視野で見ると失敗した例の方が多い。イベントには来てくれても、再度自費で訪れる人がほとんどなく、井川の活性化には程遠い。井川に移住しようとしても、仕事が少ない生活が維持できないという問題が井川への転居を阻んでいる。

(4) 峰屋のおばあちゃん (11/20 9時 井川本村の路上にて)

地元の方にインタビューを試みた。「若い人たちが井川に来てくれたらどう思われますか?」という質問をすると、「若い人たちの声が聞こえるだけで嬉しい」とおっしゃっていた。若者がたとえうるさく騒いでいたとしても、「にぎやかで楽しい」と感じるそうで、おばあちゃん達の暖かいお人柄がしのばれると同時に、日頃の生活のなかではそういうことがなくなってしまうのなかなと少し淋しい気もした。おばあちゃんのみわりは、町に出て住む人がいなくなった家や独居老人の家が多く、夜はとてでも静かで静しく感じてもらえるようだ。

今も「民宿峰屋」を経営されている。以前はダム工事の関係者や電力会社の

人が多く泊まって行かれたが、現在では井川に仕事で来ても観光で来ても泊まることが少なくなってきた。これも井川への便がよくなって目撃者が増えたためだと残念がっていた。おばあちゃん達の現在の楽しみは、病院(アイセン)で行われるデイサービスで、同じ年頃の人たちと交流したり川根本町の人などへ連れて行ってもらっていることだそうです。



渡船乗り場で見守りをするCチーム

(5) 井川支所 加藤一さん (11/20 ビジターセンターにて)

自分たちがこの 2 日間を通して考えてきたことを、井川支所の加藤さんに伝えた。実現可能なのか検証していただいた。若者が井川に何度も来たいような方法として、サークルを作って活動したらどうかという提案をした。サークルを作って定期的に井川に若者が来る機会を作り地元の人と関わることで、井川の歴史の話を聞いたり、地産などの作業をしたり、観光することで愛着が湧き、何度も来たいのではないかと考えたからだ。それに対して、「何をすればいい?」という質問が来た。井川の自然を活かした活動でなければならぬ。お年寄りと交流、地元の伝統の料理作り、ハイキングなどを出発した。また、井川のイベント情報などの情報発信する活動を静岡産業大学で行ってみたいという意見もいただいた。

(6) 連合町内会長 栗下浩信さん (11/20 14時 ビジターセンターにて)

加藤さんにお話を聞いていた時に、たまたまここで食事をしていた栗下さんを見かけ、食後事務所に戻ったところでお話を聞かせてもらった。

井川は今、「人口の 50%以上が 65 歳以上の高齢者と暮らす」限界集落だ。総人口 524 人、307 世帯と人口が少くないため、一人がいくつもの役割をこなさなくてはならない。とくに若者がいない。井川には高等学校がないので、高校生になると町の学校に行くため村を出てしまう。また、仕事をするため町で働く人も多い。「他の地域から若い人たちが来て欲しいとは思わない」という地元の人も多いが、栗下さんは若者がいないと文化の担い手がなくなってしまうので、そのままだけで変化してしまえばかきか本村に井川がなくなってしまうので、そうならないために、たくさん若者に来てもらいたい住んでもらうのが一番いい。とのお話であった。

2. 第2回現地調査 体験とインタビュー

(1) 焼煙ハウスでの体験と手強い

この日は昼前から夕方まで、小河内にある「焼煙ハウス」でアワやヒエの脱穀・精白作業の手伝いをさせていただいた。「焼煙ハウス」では、「焼煙倶楽部」と「結の仲間」という団体が活動している。今回私たちが受け入れてくれた望月仁美さんは、焼煙倶楽部の代表望月正人さんの奥さんだ。

「焼煙ハウス」は元々空き家だった建物を、工務店に勤めている望月さんの息子さん、日、我々男性は火おこし。女性達は薪ご飯作りに分かれて作業した。まず薪割り、火起こしから行った。薪など割ったことのない私たちに、右足を一歩出して薪を入れて割ると難をいめたのか、燃す時には木屑に水を点けてから木に移すことや、火に空気が当たるように導くことなど、スイッチをひねるだけでガスに点火する経験しかなかった私たちにいろいろなコツを教えてくれた。その後に行なった脱穀作業では、蒸かしたアワを釜のついたまますぐに精米機にかけてしまったため、釜の湿じった餅のようになってしまう。次は水分を飛ばしてからやってみると良いだろう。

地元では「子どもにはこの苦勞をさせたくない」と焼煙栽培が廃れてきている。しかしこの伝統を後世に伝えるべく活動されている仁美さんは、焼煙や脱穀作業を再現し人々に伝えることで「自分が生きていくことを発信しているのだ」とおっしゃっていた。

現在井川に住んでいる人々は木の性質もよく知っていて、それを活かして利用している。例えば、山野に自生しているコナラ、サクラ、ヤツ、セミ、シデなどの木は油を多く含むため、火力を維持するためには最適な燃料なのだそう。これらの木は薪し炭にして着火材として再利用している。一方、日本各地で植林されてきたスズキギヤノキは燃えやすく消し炭にもならず、さらに、根の張りも強いので山崩れの原因ともなっているそうである。そういったことから、仁美さんは黄山の山崩れの場所を指した。

山の一角を焼く焼煙は、飛び火をおこしかねない大変危険な作業である。そのため、風が弱く飛び火を起こしにくい早朝の5時頃から火入れを行う。昔は春と夏、一年に2回焼煙を行ってきたが現在では7月末～8月上旬に一回だけ焼煙を行うそう。昨年8月1日に行い、大勢の外部の人達・静岡県立大や



右足を出し薪を入れての薪割り

静大、常葉大の学生たちも焼煙の体験をしたとのことである。

小河内には何家何家があり、かつては本村の小学校には遠くで通えない井川小学校の児童のための「寺子屋」が置かれていたそうである。昼は小さな小学校、夜は大人たちが通う賭場になったこともあったようである。

(2) 望月勘さん (12/20 ガソリンスタンドにて)

井川には高等学校がないため、高校生になるには井川を出るしかなく、そのため人口が減り静かになってしまったと聞いておられた。「若い人が、井川にきて居住されることについてはどう思われますか？」という質問に「若い人がきてくれるのは嬉しいが、井川にはそもそも仕事がない」と答えられた。この地区にある事業で雇用を生み出すような産業は、温泉と建設会社くらいしかない。井川には商店も少なく観光スボットもないので、若い人が魅力を感じられない。かつて静岡市が井川地区周囲で温泉を掘ろうとしたことがあったが、500m掘っただけであきらめてしまった。「あと1000mも掘れば温泉が出たろうに」と残念さをにじませていた。

勘さんは、高齢者に分類される年齢であるが、勤労意欲が強く自分の畑をもち、家族でジャガイモやモロコシ、菜の葉を栽培している。またお話をされることが好きで、井川に対する率直な意見を聞くことができた。

昔はシカやイノシシが捕れると他地区の人が狩るようになり、買っていったが、今では買う人もおらず産業としての狩猟は成り立たなくなっているようである。

(3) 望月清志さん (12/20 ガソリンスタンド勤務)

清志さんは趣味で家用にワインを作っていてヤマブドウを採集して育てるのだが、ヤマブドウは動物たちの食糧でもあるため採取には常に危険を伴うそうである。また山で天然の舞茸やマムシ・ハチなども採取して育てる。これらは他では味わうことの出来ない独特のおいしさがあるそうである。

井川小中学校の体育館を借り、月・水曜日はパドミントン、月・木曜日はバレーボールをやっているそうである。望月さんは「地元の人には、誰かに人と交わることが好きであるが、閉鎖的な部分もある」と感じておられるようである。

(4) 遠藤弘子さん (12/20 アルブスの里にて)

「アルブスの里」は、JAL婦人部企画による、主に地元の食材を使った食品を提供する食堂である。井川地区西山平にあり、月曜日定休、故と年末年始を除いてオープン・ズン営業している。平成元年に営業を初め、4年前のリニューアルを経て観光客はもちろん、地元の人々の利用も増えている。地元の人が作った地場産品も販売しているが、本来の中心事業は手作り味噌の加工と販売だそうである。年間350kgほど生産しているが、近隣から訪れる人にも人気があるとのことだ。また、お弁当の受託生産もしているようである。

遠藤さんは、地域おこし協力隊の杉木さんに調作業の協力を求めている。最近焼煙によるソバ栽培の相談を持ちかけているとのことである。

様々な活動のネットになっているのは人手不足、特に男性労働力の不足である。「アルプスの里」に隣接する畑の稲刈りや 雑作、遊歩道の整備などに男子が欲しいそうである。若い人たちが大好きで一緒に仕事ができることを楽しみにしておられる。

(5) 井川支所 加藤憲一さん (12/20)

これまで井川でもエコツアーの企画が多くなされてきたが、それが人々には伝わっていないという。市でも力を入れているというエコツアーリズムについて、新しい企画を考えたかどうかという提案をいただいた。まず井川は川や山など豊富な自然に囲まれた土地であること、環境保護に配慮した観光開発という視点が地元ビジョンにも合致していることなどからこうしたプランが求められているようである。自然を活かした観光開発のためには、私たちはまず地元の自然や人々の暮らしをよく知らなくてはならない。そのうえで若者たちにも魅力的なプランに育てて行く必要がある。そのためにも若者の視点が必要であり、エコツアーリズムを通して大学と井川地区が連携できたらよいとおっしゃっていた。

井川小学校には「地域のことについて考える」授業があり、担当の先生は、他地域から来る学生と交流すること、子どもたちも地元のことを知ること、でき、いい勉強になるとお考えのようである。私たちが以前提案した「サークルを作る」という案に対してこのような提案をいただいた。

3. Cチームの提案

井川に若者が来る機会を作り、井川の上を体で感じ愛着を持ってもらうことで住みたいと思う人が増えるのではないかと。実際に井川に来て地元の人と交流し、井川の文化を体験してもらうことが大切である。私たちはこの地を認める機会を得て次のような様々なよきを感じることができた(右表)。

このように数多くの魅力があるが、これは実際に来て体験してみないとわからないことである。また人それぞれでも感じ方は異なるであろう。

とくに他地域では見られないものとして「渡船」がある。渡船は市道のため無料で乗ることができる。

私たちが感じた井川の良さ

- ・ 年季の入った、動物の飼育がある民宿に泊まることができる。
- ・ 年配の方々の人生経験を聞くことができる。
- ・ 船上から井川湖の景観を楽しむことができる。町では得られない静寂がある。
- ・ 見事な紅葉が見られる。
- ・ 買ってくるのではなく自分で必要なものを作る知恵を学べる。
- ・ 温泉に入ることができる。
- ・ 地元の食文化がある。
- ・ 車で帰還したシカや鹿、熊などを出しにくれる民宿がある。
- ・ 運がよければ猿・シカ・カモシカなどの野生動物に出会える。



紅葉シーズンで賑わう遊船

湖上から望む遊船

「連なる山との間に湖があり、その湖の上を船が行き交っている」という言葉の人々が回いたら驚くだろう。この魅力も実際に乗船してみないとわからない。

ここで忘れてはならないのは、かつて湖の下には村があり、ダム建設のため村の半分が沈んだことだ。今でも治水期には伐り倒した木の切株や家の基礎まで姿をあらわすことがあるという。井川ダムを造る背景には、ダムを造る人や電力会社の人、協力してくれた井川の人たち、多くの人が関わっている。美しい景観として見るだけでなく、こうしたことを知っていくのも大切だと考える。こうしたことを踏まえて、井川に定期的にいく機会を作る提案をしてみたい。例えば地域活性化サークルを作り、月に一回井川に行き、井川でいるいろいろなイベントを体験させてもらうというものだ。しかし、サークルをいきなり作るのはい大変なので、まずは一人でも多くの人と井川に行き、井川を知ってもらいたいと思う。また、自分たちも井川には3、4回しか行っておらず、人に紹介するだと思っているわけではないので、改めて井川のことを学ぶつもりで行きたいと思う。

静岡産業大学には、地域ビジネスコース、観光ビジネスコースがある。これらのコースでは静岡県内で働いてもらうために静岡県のことについて勉強する。それらのコースを選んだ学生にも興味のある人はいるだろうし、コースを選んでいる他の学生も地域おこしに興味がある人はいるのではないかと思う。学生のうちに地域に足を運び、地域の人と関わり、生きていくために何でも自分たちで作る井川の人々の知恵を学ぶことはいい経験になると思う。そういった経験は大学を卒業してからでも人に地域のよさを伝える力を養うことができる。また、自分たちに子どもができたなら連れて行ってあげることができる。